



藤香会だより

藤香会の当面の課題と展望

藤香会 副会長 中島 敏行



新年あけましておめでとうございます。さて、本年は藤香会創設から一二二年目を迎えます。本会の活動内容も

時代とともに次第に変容を遂げてきました。同時に新しい課題も当然出て参ります。私も藤香会の会員歴はほぼ四〇年で、そのほとんどが理事、事務局長、副会長の役職にあり、結果的に会運営実務の中心的立場に在ることになります。

年頭にあたり、藤香会の当面の課題やこれからの会運営について、若干の私見を述べたいと思います。

課題の第一は、会員数が長期にわたって微減の傾向にあることです。もちろん新規加入者もありませんが、高齢などの理由で退会者の方がや

多いのが現状です。会員減少の問題に対しては、種々の対策も検討し、また試みも実行して参りました。

まず試みの第一が、多くの市民の皆さんに藤香会の存在と、その活動内容を知ってもらおうということでした。

歴代藩主のご法要や黒田家の墓所清掃へのお願い、そして「藤香会だより」の発行もその一例です。「黒田奨学会」や「市民の会」との連携強化はもちろんのことです。

そこで今年、私が会員各位にお願いしたいのは、一人でも多くの人に本会への入会を勧めて

第12号
平成24年1月1日発行
発行者
藤香会事務局
092-541-8268
発行責任者
中島 敏行

欲しいということ。課題についてはこれくらいにして、会運営の新しい展望を私なりにお話します。

これまでの会運営の業務が事務局長と会計担当に集中しがちなところを改め、本年度からは、役員会の中に「事務局」を設けて執行体制の組織強化を図ることにしました。

事務局は総務・会計・広報の三つの担当で構成され、業務の分担と連携で機動効果を狙いとするものです。すでに本年度の総会や諸行事の準備、執行などで事務局体制の機能強化は証明されたように思います。

これからも会員の皆さまのご意見やご希望に

藤香会初代会長

山中立木氏のこと

藤香会創設一二〇年記念碑文に出ている藤香会初代会長・山中立木氏について知りたいという声がありますので、広報担当で調べたこと簡略にまとめました。(文中敬称略)



山中立木氏

山中立木は弘化二年(一八四五)、井上権一郎を父に七人兄妹の三男として早良郡鳥飼村に生まれ、山中矢柄家の養子となりました。

明治二十四年、「藤香会」の前身である「報古会」を結成して会長となり、昭和六年西新町で八十六年の波乱の生涯を終えました。

生家・井上家の先祖は、現在の前原市にあった高祖城の城主・原田氏の家臣でしたが、原田氏滅亡のあと、現福岡市拾六町に帰農し

十分耳と傾け、よりよい藤香会を目ざして会の運営に当たっていく所存です。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

第六回 歴史勉強会

秋恒例の「勉強会」は、藤香会と「筑前黒田家文書を読む会」との合同開催となりました。参加者は五一名でした。

1. 期日 平成二十三年九月十日(土)
2. 場所 福岡市博物館
3. 講演 「福岡藩主の参勤交代」
4. 講師 博物館学芸員 高山 英朗氏

《講演の概要》

参勤交代は、諸大名が四月を交代時期として、領国と江戸をそれぞれ一年交代で生活するように定められ、妻子は人質として江戸に居住する制度です。

しかし、第二代藩主黒田忠之公のときから、ていまして。力士として勇名を馳せた井上伊太夫のとき、第三代藩主黒田光之公に五人扶持十俵で召し抱えられました。

実父の権一郎は、砲術が家業で亀井昭陽に学び、剣術・槍術・砲術を修め、長崎警備には数十回にわたって赴いています。また、養父の山中矢柄は一七石四人扶持で十一代藩主長溥公のお側近く仕えて、参府のときもお殿様の御駕籠のすぐ横を歩いたといえます。

立木は生家、養家ともに上級藩士ではありませんが、本人が武術に長じていたため、藩政時代は文武館監察や七番小隊長を勤めました。

明治四年、廃藩置県で新しくできた城内の福岡県庁に移ってからは、吏員として、土族長、第一大区長(福岡・早良地域)、嘉麻・穂波郡長、福岡区長、那珂・御笠・席田郡長などの要職を歴任しています。

明治十年、西南戦争で薩摩軍に呼応した旧

福岡藩と佐賀藩は、夏秋のあいだ一年交代で長崎警備を命じられた代わり、十月に領国を立つて、翌年二月には下国が許されることになり、江戸滞り期間はほぼ半年間短縮されることになりました。

気になるのは、ここから江戸まで三百里といわれた道中のことです。時代が下るにつれて、ルートは天候と旅費負担が理由で船利用はなるべく少なくして陸路利用距離を増やしていったようです。

参勤交代の一つの例として、天保九年、第十一代の長溥公が江戸に上られたときの記録があります。参勤の準備は前の年の十二月に始まっています。

福岡城発駕は九月二十二日、江戸着は十月二十五日で三十四日間の旅程でした。道中は、今の時間で毎日朝四時に宿所を出、途中二度の小休止、昼食、午後一度の小休止、午後八時に旅宿着の繰返しです。(平田)

福岡藩士の決起(福岡の変)を説得した実力は広く官民に評価されました。

区長時代の明治二十二年二月、那珂川の枅形門(現昭和通り西中島橋のもと)以北の石垣二三〇段を撤去して福・博の人士のわだかまりをとき、大福岡の融和発展につとめました。

明治二十二年四月から二十五年十一月までの福岡市長時代には、博多港の特別輸出港指定、九州鉄道(現JR)開業、御笠川の埋立て工事など、福岡の産業、経済の基盤づくりに情熱をそそぎました。

市長退任後の明治二十六年から大正十一年まで、お殿様の旧恩に報い黒田家をお守りするといふ一心で黒田家の家令となりました。

青年時代は槍の名手として聞こえ、壮年時代はサムライ市長といわれましたが、生涯風雅の心を忘れず、晩年は南画に親しんで過しました。(平田)

長政公のご法要と

夏の墓所清掃

藤香会では原則として、八月四日が長政公の祥月命日のご法要、その前の日曜日を崇福寺黒田家墓所の清掃日としています。

昨年は七月三十一日が清掃日となりました。九時、まず天気は上々。驚いたことに、高く伸び放題であるはずの茅など夏草があらかた草刈り機で刈り取られていたことです。寺務所に尋ねると数日前に一人の方が草刈り機で刈っておられましたとのこと。今もその人の名前はわかっていません。

当日の清掃参加者は、会員がちょうど五〇名、ボランティアの方が五一名で前回と同様一〇〇名を超えました。ボランティアの皆さんとともに、行う墓所清掃も八回目となり、参加者の技術・要領の向上で終了予定時間を一時間近くも早めることができました。

長政公の三八九回忌ご法要は、八月四日(木)、岩月海洞住職を導師に崇福寺で行われました。参列は山崎拓会長をはじめ会員四六名、黒田奨学会と一般市民の皆さんで二三名でした。

小石原・秋月の史跡を訪ねて

恒例の秋の行事、会員の学習と親睦をかねた福岡藩ゆかりの史跡を訪ねるバスツアーは、快晴に恵まれた十月二十六日(水)、ご家族を含めて会員四一名が参加し、小石原(東峰村)・秋月を巡りました。

民陶の里、小石原では陶工であり藤香会の会員でもある太田和孝さんと東峰村村会議員、長澤貞義さんの案内と説明をいただきました。まず旧小石原小学校裏山の山頂に遺構が残る、筑前六端城の一つ福岡県指定史跡・松尾城(小石原城)跡を見学、霊峰英彦山を望みながら

会員クリック⑪

家業 四代

藤香会会員 石蔵利光



私は「石蔵屋」四代目として、昭和二十五年二十三歳で家業の酒造業を継ぎました。曾祖父で初代の石蔵利八正則は明治四年に本家から造り酒屋として分家しました。

初代・利八は次男でしたが、分家のとき、ちょうど神屋町(昔は大浜町)に造り酒屋を廃業する人があつたのでそれを買ってもらったそうです。

初代が造り酒屋を始めたのは、写真やそのほか、いろいろ考え合わせると、青年になつ

往時をしのびました。また、鬱蒼とした樹齢三〇〇〜五〇〇年といわれる老杉の巨樹に囲まれた静寂のなかを散策、森林浴も愉しみました。天和二年(一六八二)、黒田第三代藩主光之公が肥前伊万里の陶工たちを招いて開窯された今日の小石原焼の歴史と、近代から現代にいたる陶磁器を、わかり易く展示紹介する伝統産業会館では小石原焼を再認識しました。

太田さん宅の敷地内には、小石原焼の元となる中野焼の開窯時の大きな登り窯跡に隣接して黒田家十五代長久公の墨跡が刻まれた巨大な記念碑が建立され、長久公と第十六代当主の長高様が植樹された紅白の親子枝垂れ桜が立派に育っていました。

今年の史跡めぐりの締めくくりは小京都の趣を漂わせる城下町秋月です。秋月黒田藩の菩提寺古心寺をたずね歴代藩主、正室、子女たちの苔むす墓石の文字を認識しながら、史跡めぐりの担当者大島泰治理事の説明を受けました。境内の一角には、吉村昭の著「遺恨あり」で紹介され、TV放送された、日本最後の仇討」とい

たばかりのころと思われれます。写真で見る曾祖父は大きくりっぱな体格をしています。祖父も父親ゆずりで堂々たる体躯をしていたので、日露戦争では二百三高地を占領して勲章を戴いています。戦地での無理がたたつたのでしよう、帰還のあと結核で三十三の若さで他界しました。

話を家業のことに戻しますが、本家の酒の銘柄は「吉野」といいました。分家の初代・利八は自分の作った酒を「初吉野」と命名しました。むかしのランク付けで特級酒に相当する一級酒は「播磨野」と名づけました。私どもの先祖は黒田公の御用商人で、黒田如水公が播磨の出自だからです。石蔵の先祖は長政公の筑前の国拝領とともに豊前中津から博多に來たと聞いています。

もと本家の店は鯛町(現須崎町)の川べりにあり、大阪などからの船の出入りに便利な

られる、白井六郎の墓が両親の墓にひっそりと佇み、皆さんの興味を引いていました。

限られた時間でしたが、楽しく過せ、次回の史跡めぐりに思いを馳せながら帰路につきました。(村松)



「中野焼古窯跡記念碑」の前で

ところでした。石蔵家は造った酒を彦岐、対馬に出荷し、帰りの船に薪や木炭・海産物を積んできたそうで、小さな廻船問屋のようなことをしていたようです。

いつのころか石蔵家は名字帯刀をゆるされ、お城参上ときは袴を着用していたそうです。石蔵の本家は、大正の初期に東京に住むようになり、拝領の刀は土蔵に保管していましたが、昭和二十年の福岡大空襲で焼失してしまいました。

曾祖父は私から言わせれば、勤勉の一語に尽きますが、一方、貯めたお金で書画骨董を蒐集してました。もちろんこれも空襲で消亡です。

曾祖父とちがつて、父と私は書画骨董には無関心で焼失しても惜しいとは思っていません。人間それぞれです。

編集後記

今号の「会員クリック⑪」にご登場いただいた石蔵利光さんは、(石蔵酒造・博多百年蔵)の社長さんです。寄稿をお願いした矢先の十月八日、築一四〇年で国の文化財に指定されている会社の酒蔵が火災に遭いました。早速、藤香会からも代表でお見舞いに駆けつけたと聞いていましたが、火災からおよそ二か月後の十二月三日、石蔵社長は「平和楼」での忘年会にいつものように元気に出席されました。

石蔵さんは会の席を借りて、火災の実状を話したうえ、藤香会の皆さまにということで見舞いのお礼を述べられました。

その後、百年蔵は急ピッチで復旧工事が進み新年早々には開店の運びとうかがっています。社業の益々の隆昌をお祈りするばかりです。

(平田)

